

近世の百科事典を読み解く

(2班作成教材)

ワークショップ参加者:国立国会図書館司書・県立長野図書館司書・中学教員2名

東京大学大学院情報学環研究員・神奈川県中学校司書

教材作成担当:高橋 傑(慶應義塾普通部)

メタデータ作成担当:高橋 今日子(横浜市西本郷中学校)

成形成説 卷4

曾槃, 白尾國柱 [ほか編]『成形成説 卷4』(国立国会図書館所蔵)

「国立国会図書館デジタルコレクション」収録

<https://jpsearch.go.jp/item/dignl-2546012>

薩摩藩主島津重豪(1745-1833)の命により編纂された農業百科事典。寛政5年(1793)に編纂が開始された。農事、五穀、菜蔬、薬草、魚介、禽獣等の部に分けて当初は100巻を予定していたが、二度の火災による版木の焼失や藩の財政窮乏で、公刊されたのは最初の3部30巻のみである。品名にはオランダ語訳が付されている。本書には多色刷りの特製本と墨刷本があるが、この本は前者で、挿絵が美しい。重豪は好学で知られ、ティチングやシーボルトとも直接交流した。

国立国会図書館「江戸時代の日蘭交流」

https://www.ndl.go.jp/nichiran/s2/s2_1_2.htm#h5_6

より引用



発問

「右下の二人は、何をしているのでしょうか？」

「二人の会話を想像してみましょう。」



全体はどんな様子？

1. 農村が描かれている。
2. 猪が稲を食べている。
3. 鹿や鳥が田んぼの中にいる。



猪・鹿・鳥が、稲を食べようと集まっている。



右下の二人を観察する①

1. 右の人、左の人ともに、手に鉄砲を持っている。
2. 右の人は、猪・鹿の方を指さしている。輿には刀を一本差している。
3. 左の人は、ほっかむりをしている。手には煙管と火縄。



右下の二人を観察する②

1. 右の人が左の人に、鉄砲で鹿や猪を撃つことを依頼している？
2. ということは、二人とも鉄砲を持っているが、左の人がプロ？
3. 右の人は腰に刀を差しているけど、武士の格好ではない？



左の人は猟師？右の人は、庄屋さん？二人とも武士ではなさそう。



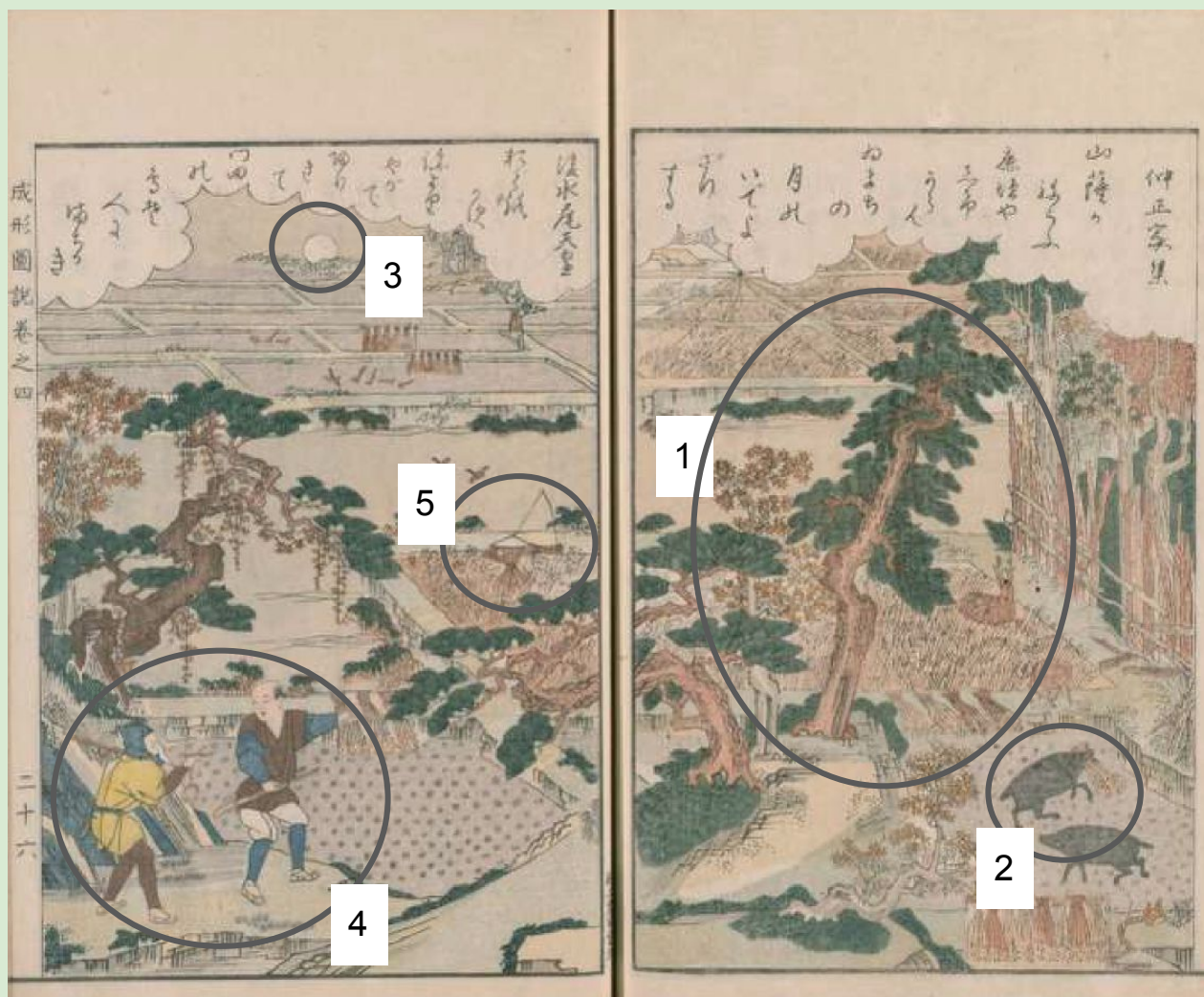
もう一度全体をみて ヘンなところは？

1. 松と紅葉だけ？
2. 猪が稲を食べる？
3. 昼なのに月？夜？
4. 刀狩があったのに、鉄砲を持ってる？
5. かかしが効果なし？

などなど



4. について考えてみよう。



農村の人が鉄砲を持ってる？

この挿絵が載っている成形図説は、薩摩藩主島津重豪の命で、1793年から作成されはじめた。



当然、秀吉の刀狩りより後の時代に描かれている。



生類憐み令よりも後の時代である。



農村に鉄砲はあったのか???



猪・鹿・鳥を除ける しかけ

- 1 案山子
- 2 猪垣
- 3 鳴子
- 4 ???

↓
いろいろな工夫がされているが、
食べられてしまっている。

↓
鉄砲は動物を追い払うための最
後の切り札か？



農民は鉄砲を持っていた

右の絵は、天草・島原一揆における、原城攻防戦を描いた絵図。左端にあるのが、一揆勢が立てこもった原城。

1. 右側には、大名の旗が立ち並んでいる。
2. 城と大名陣地の間には、たくさんの櫓が建ち並んでいる。



まるで、大名同士の合戦のよう。鉄砲無しには、大名とこんな戦争はできないはず。



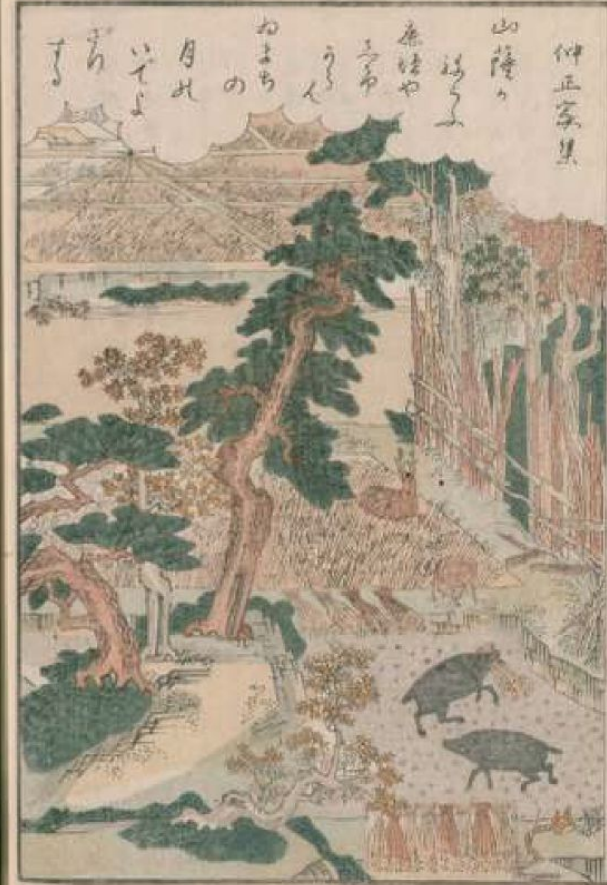
秀吉の刀狩りより後の時代でも、農民は鉄砲を持っていた。



筆者不詳『島原城攻撃図』(東京国立博物館所蔵)
「CoIBase」収録
(<https://jpsearch.go.jp/item/cobas-47139>)

江戸時代の大名と農村

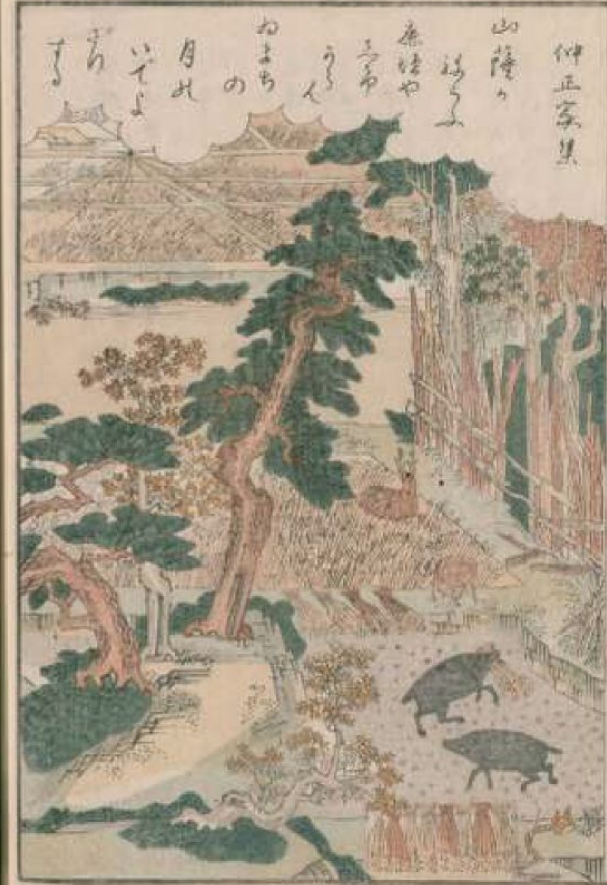
- ・農民は鉄砲を持っていたけど、大名は怖くなかったのか？
- ・農民から鉄砲を没収して、武士が猪や鹿を追い払ってはいけないのか？



江戸時代の大名と農村

大名は農村に任せられるところは任せ、農村も任される実力を持っていた(年貢のとりまとめ、鉄砲の管理など)。

この挿絵の主題は、さまざまな獣害から農作物を守るしくみをえがくことですが、何気なく描かれた右下の二人に着目することで、当時の農村のあり方がみえてきます。

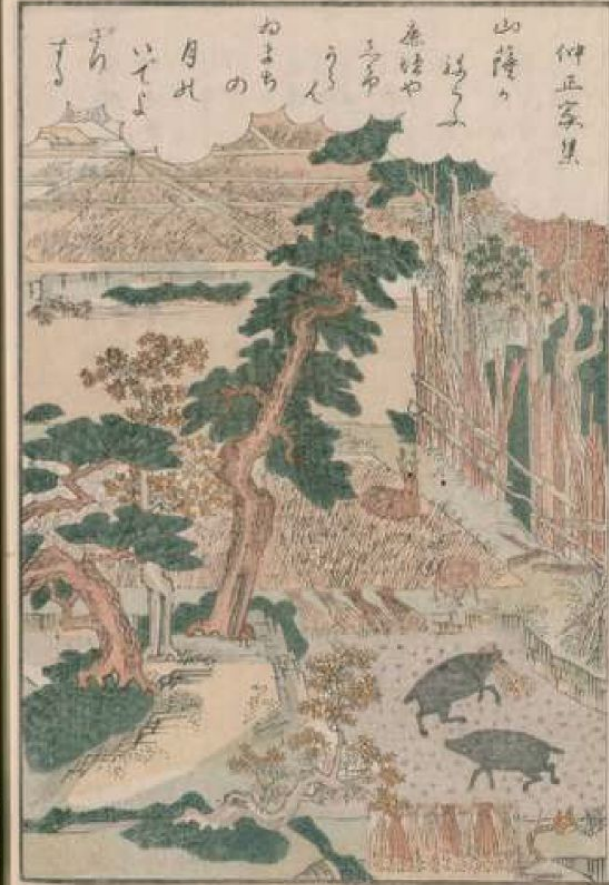


先生方へ①

この挿絵は、成形図説の中で、様々な獣害をよけるしかけについて説明されている部分のものです。

ここでは、いわゆるかかしについて、古事記・曾禰好忠(平安中期の歌人)・玄宝(平安期の僧侶)・日本書紀通証(近世の日本書紀の注釈書)・天工開物(明松の産業技術書)・冠辞考(賀茂真淵の枕詞の辞書)など、様々な和漢の書からの引用がなされ、説明が加えられています。また、「蕃名」として、外国語ではどう言うか、ということも載っています(蘭癖と呼ばれた島津重豪の影響でしょうか)。近世の大名が、知識をどのように得たのか、ということが窺い知れます。

そして、如何に鹿や猪の害から逃れるかということについて、人がいるということを意識させることが大事だと語られます。鎌や鋤、蓑笠を着せたかかしを立て、鹿威しや鳴子を使って音をたて、草や馬の尻尾の毛を燃やすなど、涙ぐましい努力がなされていることがわかります。



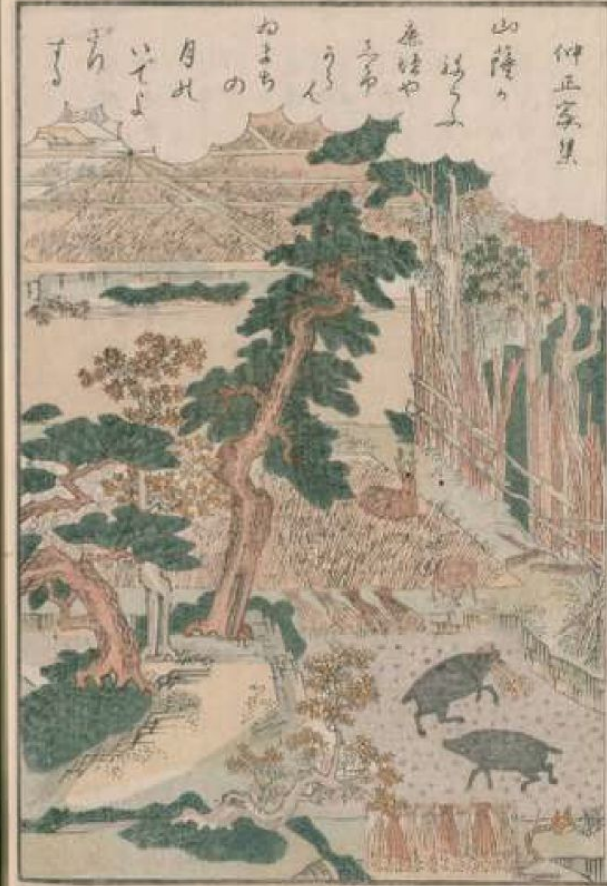
先生方へ②

成形図説では、鹿や猪の害について、「さながら人馬の踏躪(ふみただらか)せしよりあさまし」と記述し、最終的には罾を使って捕らえるしかないと記述しています。なかなか厳しい現実が、そこにはありました。

ところが、鉄砲の使用については、一切書かれていません。これは、大名として鉄砲の使用を書くことが憚られた、農村における鉄砲の使用を、公然と認めることは難しい、という、なかなか微妙な状況を示していると考えられます。

右下の二人の人物が描かれたのは、仲政の歌を引用したためとも考えられますが、ここに描かれているということは、明らかな間違いではない、ということでしょう。

農民の鉄砲の所持は、様々な制限が加えられていますが、禁止されることはありませんでした。大名は農具としての鉄砲の所持を認め、天草島原一揆以降、農民は鉄砲を一揆で使用することはしませんでした。



先生方へ③

挿絵の上には、二人の和歌が載せられています。

・源仲政(生没年不明、平安後期)

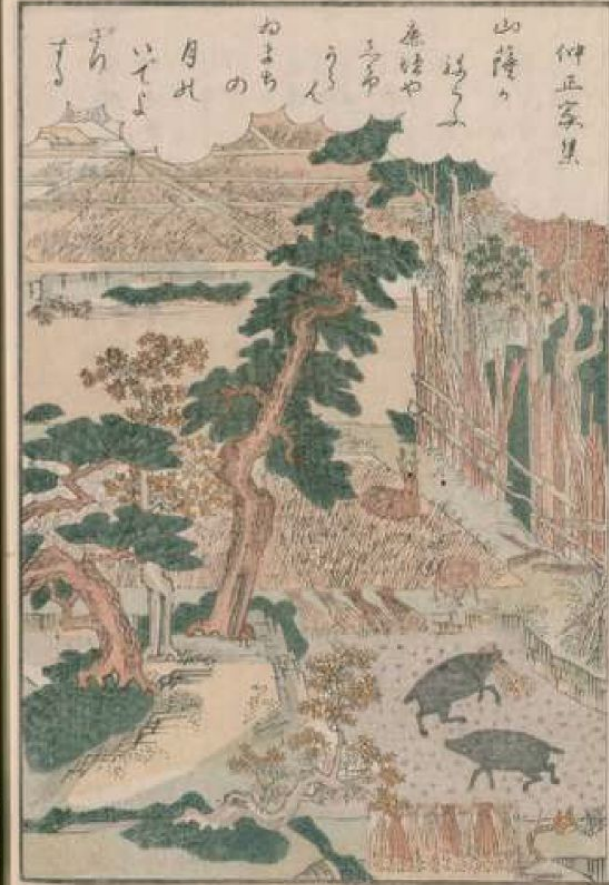
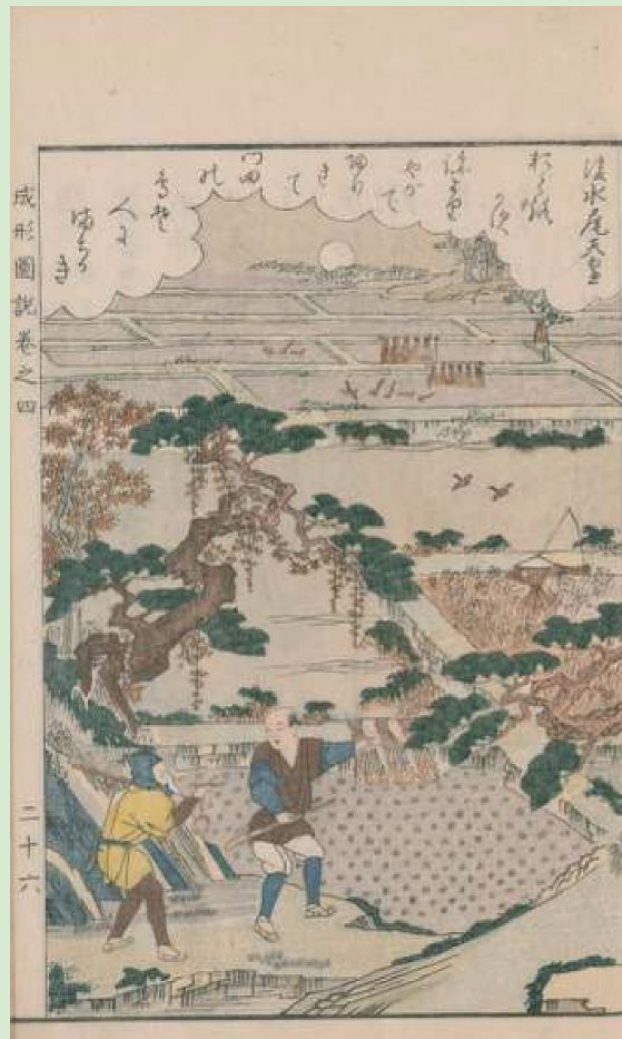
山薩(やまがつ)か、ねらふ鹿垣や、しけからん、いまちの月の、いでよさりする

・後水尾天皇(1596-1680)

おどろかす、旅よりやがて、帰りきて、門田の鳥そ、人にまちかき

これらの歌は、獵師が鹿を狙う様子や、鳥が田に居る様子が描かれ、本文の内容と対応していますが、挿絵の構図として、これらの歌が逆に踏まえられています。月が描かれているのは、仲政の歌に月が出てくるからと考えられません。

この挿絵は、このようは背景で作成されたのです。



参考文献

武井弘一『鉄砲を手放さなかった百姓達』（朝日選書868、2010年）

藤木久志『刀狩り』（岩波新書965、2005年）